Soma と Vṛtra

土　山　泰　弘

I　Brāhmaṇa 文献の特徴は，祭祀あるいは祭祀を構成する Mantra，行為，祭具等の諸要素を解釈することにあるが，その常套手段として神話的なモチーフがしばしば用いられる。このうち愛好されるもののひとつに Vṛtra 神話がある。この神話的モチーフが祭祀解釈に適用される場合[1]を，Vṛtra に着目して検討するとき，Vṛtra が実際の祭祀の諸要素に結びつく場合と，然らざる場合とがある。

初めに後者の場合をみると，Indra が Vṛtra を倒して後，自ら力（e. g. indriya, ojas, vīrya）を失うという物語がある。このとき消耗した Indra が力を回復するのは，例えば Indra と Agni へ Puroḍāśa を献供すること（Tait. Br. 1. 6. 1. 7），Śrāyantīyasāman（Pañc. Br. 18. 11. 1）等[2]によってである。Sāṃnāyya の釈義はこのモチーフを用いる（Mait. S. 1. 10. 5：146. 2–5 Kāṭh. S. 36. 1：68. 5–6 Śat. Br. 1. 6. 4. 4–9）。また Vajra 等による Vṛtra 殺しのモチーフをふまえて Śakvarī-sāman（Jaim. Br. 1. 194），満月祭（Śat. Br. 6. 2. 2. 19, 11 1. 3. 5）等によって Vṛtra を殺すという[3]。いずれも Vṛtra 神話に由来する種々のモチーフを用いて祭祀的要素を根拠づけることに眼目があるが，Vṛtra 自身はこれら諸要素に直接関係をもってはいない。従ってここで Vṛtra は Indra をはじめとする神々によって倒されるという否定的な性格が顕著である。Vṛtra は端的に悪（pāpman），敵（bhrātṛvya, abhimāti）と一致され，あるいは対応させられる。例えばさきに言及した Śat. Br. 6. 2. 2. 19 では Indra が満月祭を行うことによって悪としての Vṛtra（vṛtra- pāpman-）を殺したという。他に Adhvaryu 祭官が祭剣（sphya）を手にとる行為を説明して，Indra が Vṛtra にむけて Vajra を振り上げた如くに，その Vajra（ここでは Sphya を指す）を悪しき憎むべき敵（pāpman- dviṣat- bhrātṛvya-）に対して振り上げるという（Śat. Br. 1. 2. 4. 3）[4]。

これに対して，同じ神話的なモチーフを用いて祭祀の諸要素を根拠づけるにあたって，それら諸要素が Vṛtra に由来するものとして解釈される場合がある。例えば殺された Vṛtra の頭から牛が生じた（Tait. S. 2. 1. 4. 5–7）。その眼が眼膏（añjana）となった（Tait. S. 6. 1. 1. 5. cf. Śat. Br. 3. 1. 3. 12. Kāṭh. S. 23. 1：73.

10–11 Mait. S. 3. 6. 3：62. 8–10）。殺された Vṛtra の臥した水が Vahantī 水となった（Tait. S. 6. 4. 2. 2–3 cf. Mait. S. 4. 5. 1：62. 13–15）[5]。いわば Indra が与えたインパクトのもとで，Vṛtra から諸要素が導き出されるのであって，Vṛtra は積極的な意義をもっている。

この場合のひとつの形式として，Vṛtra が Indra の振り上げた Vajra を恐怖して自ら展開したものを Indra あるいは神々が享受するという場合がある。Traidhātavī は米，大麦，米の三層よりなる Puroḍāśa を Indra と Viṣṇu へささげる儀礼であるが，これに対する釈義の概要は次のようである。

太初において，一切すなわち Ṛc, Yajus, Sāman の三つの Veda が Vṛtra のうちにあった。Indra は Viṣṇu の助力をえて Vajra を Vṛtra へ投げようとするが，恐怖した Vṛtra は Indra に対して自身の vīrya，すなわち三つの Veda を与えた。従って今もなお三つの Veda によって祭祀が行なわれるのである。Indra は Veda を受けとって後，Vṛtra の拠所を破壊したが，そこにあった知（vidyā）が三つ（tridhātu）であったためにこの儀礼は Traidhātavī といわれる（Śat. Br. 5. 5. 5. 1–6）[6]。

この例は Vṛtra が Indra のインパクトによって祭祀を展開するにあたって，当該儀軌に対応して，展開された祭祀は Traidhātavī であり，本儀礼の主神である Indra と Viṣṇu がそれを享受するのである。釈義が扱うのは祭場の事柄であるから，ここにいう Vṛtra からの祭祀の展開とは祭祀世界の場をかりた一種の Cosmogony とみることができよう。Ṛgveda の Indra-Vṛtra 神話を創造神話とみる説がある[7]が，Brāhmaṇa では Indra, Vṛtra の両つの神話的表象がいわば機会因と質料因と~~という二大原理~~の如き抽象化された側面をみることができる。

II　以上の諸例から釈義における Vṛtra は，儀軌との関わりにおいて消極的な位置を占める場合から積極的に儀礼を根拠づける場合に至るまで多様な性格をもつことが知られる。ところで以上の他に，Vṛtra 自身が直ちに他の具体的事物と一致されるときがある。そのうち主要なものは Soma と月であって[8]それぞれ Soma 祭と新満月祭の釈義において重要な意義を有する。Brāhmaṇa では Ṛgveda 以来の Soma ＝月という観念が継承されるが，この観念があらわれる文脈に Vṛtra は言及されない。従って Soma＝Vṛtra と月＝Vṛtra の両つの観念は区別して扱うことができよう。以下に Soma＝Vṛtra の観念と，それが Vṛtra 神話にくみこまれて祭祀解釈に適用される事情を検討する[9]。

Soma＝Vṛtra の観念の由来については学者の間に一致をみないが，諸説はい

ずれも神話研究の視点からアプローチする傾向が強い[10]。ところでかかる観念が言及される釈義を儀軌的な背景を考慮して検討するとき，Vṛtra と一致される Soma は供物としての Soma に他ならない。Soma＝Vṛtra が言明される釈義は以下のように大別される。

(1) 儀軌的に Soma が Ājya と関わるとき Soma が Vṛtra に一致されるに対して，Ājya は Vajra とされる。

「Ājya としての Vajra によって神々は Vṛtra を殺した。両つの Sruc (祭杓) によって，すなわち両腕でもって (Vṛtra を殺した)。Soma は Vṛtra である。それ (Soma) の傍で Ājya を献供するとき，Soma を殺すのである。」(Kāṭh. S. 24. 9:100. 13-14)

祭場に導入された Soma の傍で Tānūnaptra が執行される事情について以上のように説明する。Tānūnaptra とは先行する Ātithyeṣṭi に使用した残りの Ājya の名称であるとともに，その Ājya をめぐる儀礼全体をも意味する[11]。Tānūnaptra につづいて Madantī と称する湯を Soma に灌いで膨張させる儀礼(Āpyāyana) が行なわれる[12]。

「それ (Soma) を殺すこと，すなわち窒息させるとは[13]，それを膨張させることである。Soma を膨張させる者らはこの世界から (天界へ) 赴く。」(ibid. 100. 15-16)

Tānūnaptra は Āpyāyana との関連のもとに Soma を Ājya によって殺すと解釈されるのである。従って同じ Tānūnaptra を扱う他派の釈義においても Vṛtra が供物としての Soma を指示していることが知られる。

「この点について人々は言う—Soma 王の傍で Ghṛta (＝Ājya) を献供するとき，Soma 王の傍でいはば残酷を行うのである。なぜなら Indra が Ghṛta としての Vajra をもって Vṛtra を殺したのだから—と。」(Ait. Br. 1. 26)[14]

(2) 一般に Soma を圧搾する行為は Soma を殺すこととして解釈されるが[15] Soma＝Vṛtra の観念が作用する文脈ではそれが Vṛtra 殺しに連なる。

「次に圧搾石の上に Soma をおいて別の圧搾石 (grāvan) を手にする。それら圧搾石は岩でできている (aśmamaya)。Soma は神である。なぜならば Soma は天にあるから。Soma は Vṛtra であった。山 (giri, pl.) 岩 (aśman' pl.) がそれの身体 (śarīra) である[16]…それゆえ (Soma を) 圧搾するときにはそれを殺すのである。」(Śat. Br. 3. 9. 4. 2.)

この釈義は Soma＝Vṛtra の背景にある神話的表象の連関を知るうえでも重要である。Ṛgveda において植物 Soma は天上の Soma として神格化されているが，天は Vṛtra の居所のひとつでもある[17]。天は山とも表象されて Soma が生

育する場所である[18]が，山はまた Vṛtra をはじめとする Ahi, Dāsa の棲むところでもあって[19]，ここに牝牛や水が閉じ込められている[20]。Indra がそれらを解放すべく戦いを行うとき，この山 (giri, aśman) を Vajra によって破壊するという[21]。かかる表象を背景として圧搾石に囲まれた Soma 草を，天/山を居所とする Soma / Vṛtra として解釈するのである。

圧搾された Soma 汁は浄化器 (pavitra) によって濾過されてのち汲み出されて献供される (Graha) が，このうち Indra と Vāyu へ捧げる Graha (Aindravāyava-graha)[22]に関する釈義の中で，圧搾された Soma，すなわち殺された Vṛtra からの種々の Graha の展開が述べられる。

「(Indra は Vṛtra へ Vajra を投じてのち，Vṛtra を倒すことができなかったことを恐れて逃走する。そこで神々によって遣わされた Vāyu が Vṛtra の死を確認すると，—Śat. Br. 4. 1. 3. 1-4) 彼ら神々は (殺された Vṛtra へ) むかって行った。獲得物を手に入れようとする如くに。(神々の) 一柱がとらえたものは Ekadevatya[23]となった。二柱が…Dvidevatya…多く (の神々) が…Bahudevatya となった。それを諸々の容器によって汲み分けた (vyagṛhṇata) が故に Graha と称されるのである。」(ibid 4. 1. 3. 5)

Graha のために圧搾された Soma 汁を汲み出す行為が，殺された Vṛtra を神々が獲得することとして解釈している。

Vṛtra 殺しのモチーフは個別の Graha に対する釈義においてもくり返される。

「彼ら (神々) は Indra と Vāyu へ捧げるそれ (Soma 汁) を汲んだ。それ故に Vṛtra を殺した。敵を殺す Soma が勝利のために汲まれる。Vṛtra が Soma である。それは殺されて浄められた。」(Kāṭh. S. 27. 3: 142. 2-4)[24]

浄められたとは，圧搾された Soma の汁が濾過される儀軌を意味している。この事情を Śat. Br. では神話的表象を用いて次のように解釈している。

「それ (殺された Vṛtra) は腐敗した。かの酸臭が彼ら (神々) のもとへ吹いていった。それは献供に適当ならず，(神々の) 享受に適当でなかった。彼ら神々は言った—Vāyu よ，それを我らが為に吹き散らして，我らが為に美味とせよ—と。」(4. 1. 3. 6-7)[25]

以上のように供物としての Soma をめぐって Vṛtra 神話の枠組を適用するとき，Soma＝Vṛtra の観念はその釈義を支える重要な意義をになう。すなわち Soma が圧搾されて神々へ献供される儀軌的事情が，Indra あるいは神々による Vṛtra 殺しと，その享受として解釈されるのである。Soma と一致される Vṛtra の神話的表象は祭場における Soma のあり方に対応し，それと結びついているこ

とが知られる。

III ところで Soma をめぐる釈義の中には，本稿-I で検討した，Vṛtra から祭祀的要素が展開する形式が Soma＝Vṛtra の観念と結合する場合がある。

Hāriyojana-graha[26]で Soma が注ぎ込まれる木桶 (Droṇakalaśa) が Vṛtra より生ずる。

「(Soma 汁を) Droṇakalaśa の中へ汲む。Soma は Vṛtra であった。神々が Vṛtra を殺したとき，その頭が裂けた。それは Droṇakalaśa となった。その中に液汁 (rasa) が入るだけ流れこんだ。」(Śat. Br. 4. 4. 3. 4.)[27]

また Ukthya-graha[28]の釈義は Vṛtra よりの祭祀の展開と，それを神々が享受するという Traidhātavīya の釈義の形式と同じである。

「Indra が Vṛtra にむけて Vajra を振り上げた。かの Vṛtra は振り上げられた Vajra を恐怖した。彼は言った—私に (vajra を) 投げてはならない。私にはこの力 (vīrya) がある。それを汝へ与えよう—と。彼 (Indra) に Ukthya を与えた。…二度…三度与えた。(Vṛtra が) māyā を失ったとき Indra が殺した。なぜならそれ (Vṛtra) の māyā が祭祀であったから。」(Tait. S. 6. 5. 1. 1-2)[29]

すでに検討したように，Soma としての Vṛtra を神々が享受することが儀軌的には Graha の実現を意味するから Indra が Ukthya を享受する背景には，単に祭祀解釈の一形式を適用したにとどまらず，それを支える観念として，Vṛtra と Soma 汁との結びつきを推測できよう。この釈義は，神話的モチーフを用いて祭祀解釈を行う際にみられる，儀軌的事情との微妙な関係を示している。

---

1) この類の研究としては例えば K. Hoffmann, Die Komposition eines Brāhmaṇa-Abschnittes (MS. I. 10. 14-16) Renou Commem. Vol. pp. 367-380 (=Aufsätze zur Indoiranistik pp. 207-221).

2) 他に Pañc. Br. 18. 5. 2 Mait. S. 2. 1. 3: 5. 1-2; 4. 4. 9: 59. 16-17.

3) E. Benveniste et L. Renou, Vṛtra et Vṛθragna p. 150 n. 1. 参照

4) 他に Tait. S. 1. 6. 11. 6; 2. 1. 3. 4, 5 Kāṭh. S. 21. 8: 47. 3 f Śat. Br. 1. 6. 3. 32; 6. 4. 2. 3 et passim.

5) その他に例えば Nānada-Sāman (Ait. Br. 4. 2) 蓮の花 (Mait. S. 4. 4. 7: 58. 16-18; Pañc. Br. 18. 9. 6) Darbha 草 (Kāṭh. S. 23. 1: 73. 18-20 Mait. S. 3. 6. 3: 63. 2-4 Tait. S. 6. 1. 1. 7. cf. Tait. Br. 3. 2. 9. 2 Śat. Br. 7. 2. 3. 2.)

6) 他文献の関係箇所ならびにこの儀礼に関する詳細は W. Caland, Altindische Zauberei pp. 125-128 (§ 178).

7) 例えば H. Lüders, Varuṇa pp. 183-196 W. Norman Brown, The Creation Myth of the Ṛg Veda JAOS 62 pp. 85-98 (=India and Indology pp. 20-33) F. B. J. Kuiper, The Ancient Aryan Verbal Contest IIJ 4. pp. 218-219.

8) 本文に引用される箇所を含めて Vṛtra＝Soma: Kāṭh. S. 12. 3 (165. 1) 24. 9 (100. 14) 27. 3 (142. 3) 29. 1 (167. 5) Mait. S. 3. 7. 8 (87. 17) Śat. Br. 3. 4. 3. 13, 3. 9. 4. 2, 4. 1. 4. 8, 4. 2. 5. 15, 4. 4. 3. 4 ＝月: Śat. Br. 1. 6. 4. 13, 18 その他 ＝腹 (udara): Tait. S. 2. 4. 12. 6 (「飢えは人間の敵 (bhrātṛvya) である」) Kāṭh. S. 12. 3 (165. 1) Mait. S. 2. 4. 4 (41. 18) 3. 6. 7 (69. 2) cf. Śat. Br. 1. 6. 3. 17 ＝山 (giri): Mait. S. 4. 5. 1 (62. 13).

9) Vṛtra＝月に関しては別に発表する予定である。

10) S. Lévi, La Doctrine du Sacrifice dans les Brāhmaṇas pp. 168-171 A. Hillebrandt, Vedische Mythologie II 1929² p. 186 H. Lüders, Varuṇa p. 179 H. Lommel, Kopfdämonen im alten Indien Symbolon 4 pp. 158-161 (=kl. Schr. pp. 422-425) cf Sāyaṇa ad ŚB 3. 4. 3. 13.

11) Caland-Henry L'Agniṣṭoma N° 45 (pp. 61-62).

12) ibid. N°s 46-47 (pp. 62-63).

13) 犠牲獣 (paśu) 屠殺の方法である。Soma と paśu は一致される。e. g. Tait. S. 6. 1. 9. 6: 6. 4. 4. 1 Kauṣ. Br. 13. 4 Śat. Br. 3. 8. 3. 33.

14) Tait. S. では Ghṛta としての Vajra によって Soma を殺したと言い，Vṛtra を言及しない (6. 2. 2. 4). なお本文にみられるのと同様の観念が類似の儀軌に関してくり返される。Tait. S. 6. 3. 7. 5: 6. 4. 4. 2 Mait. S. 4. 7. 4 (97. 14) Ait. Br. 2. 23 cf. Śat. Br. 3. 4. 3. 11: 3. 6. 3. 17: 3. 9. 3. 26. (このとき Soma＝retas)

15) e. g. Tait. S. 6. 4. 4. 4: 6. 6. 7. 1 Śat. Br. 3. 3. 2. 6: 3. 9. 4. 2 Ait. Br. 3. 32.

16) cf. Vṛtra＝giri (注8参照) なお類似の観念が Śvetaketu Auddālaki の言として Śat. Br. 3.. 4. 3. 13: 4. 2. 5. 15 にもみえる。 17) Lüders, Varuṇa pp. 167-174 18) Hillebrandt, Ved. Myth. I 1927² pp. 240-244, 362. 19) ibid II. pp. 160-163.

20) ṚV 1. 121. 9: 6. 43. 3: 9. 108. 6: 10. 68. 4.

21) ṚV 1. 130. 3, 7: 2. 14. 6: 4. 16. 6: 4. 17. 3: 4. 30. 20 vajra が aśman といわれる場合がある。Śat. Br. 3. 9. 4. 3. cf. ṚV 10. 89. 12: 2. 30. 5: 4. 22. 1

22) Caland-Henry. N° 132-a) (pp. 162-163) N° 144-a) (pp. 199-201).

23) Eka-, Dvi-, Bahudevatya とはそれぞれ一柱，二柱，三柱以上の神格に捧げる Graha をいう。Sāyaṇa はこの Brāhmaṇa の注釈において，順に Mahendra, Āśvina, Vaiśvadeva の各 Graha を例示する。

24) この Aindravāyava-graha に関する他派の釈義では Vṛtra を言及せず Soma 殺しを述べる。Mait. S. 4. 5. 8. (75. 1-5) Tait. S. 6. 4. 7. 1-2 その他 Maitrāvaruṇa-graha に関する釈義ではいずれも Vṛtra 殺しのモチーフが用いられる。Śat. Br. 4. 1. 4. 8 Mait. S. 4. 5. 8 (75. 12-17) Kāṭh. S. 27. 4 (142. 14-16).

25) Tait. S. では Soma の腐敗とその浄めを述べる (6. 4. 7. 1-2)。

26) Caland-Henry N° 247-a) (pp. 383-4).

27) 同様に Tait. S. 6. 5. 9. 1 Mait. S. 4. 7. 4 (97. 18-98. 3) Kāṭh. S. 28. 9 (183. 9-11).

28) 以下本文に引用する釈義は Tait. S. 1. 4. 12. a (mantra) を対象とする。Caland-Henry N° 132-f) (p. 167).

29) 同様に Mait. S. 4. 6. 5 (85. 4-6).

(駒沢大学講師)